

# 江戸の猿飛佐助

高橋圭一

昭和三五年六月一六日付『朝日新聞』（大阪版朝刊）に、当時大阪城天守閣主任であった岡本良一氏が「猿飛佐助考」を寄稿された。池田蘭子氏の『女紋』の初版発行が同年一月三〇日であるから、かなり早い反応と言つてよい。少し長目に引用する<sup>1)</sup>。

私には池田さんのこの「猿飛製造説」には妙に引つかかるものがあった。早速おぼろげな記憶をたよつて、大阪城天守閣所蔵の「新撰実録泰平楽記」の標題のついた一枚の古地図を見直した。

この地図は図中右下部に「文政八年乙酉王春謹写若林勝徳」うんぬんの書き入れのあるものでちよつと見るとありふれた大阪夏の陣の東西両軍配陣図である。しかしその用紙の古さ加減も人名・地名その他の書き入れの書体も「文政八年」にあえて不審をさしはさむ余地のないものである。ところがよく点検すると大変注意すべき記入がある。大阪方の第一線四天王寺付近に真田の軍勢が最後の布陣をしているのは史実の通りだが、その真田勢の人名の中になんと猿飛佐助が堂々とその名を連ねているのである。「文政八年」うんぬんの書き入れが、念のいった後代のいたずら書きでないならば、真田大助らと肩を並べて書き入れられている猿飛佐助は、おそらく文政八年にはすでにひとかどのネームバリユ一のある人物として、世人の口にはぼつていたことになる。私は思いあたる節もあつて、それからは猿飛佐助の系図（？）調べに

努めた。たまたま高知在住の佐田浩さんという方から写本の「真田三代実記」を見せてもらう機会に恵まれた。この写本は四巻しかなく完本ではないが、各巻の末尾に天保四年に写した奥書きがあつて、これについても一点の不審を差しはさむ余地はない。そしてこの写本にも猿飛佐助が出てくるのである。彼にはまだまだスーパーマン的面影は認めることが出来ないが、それでもはつきりと忍びの達人として登場している。わずかに二例にすぎないが、これだけでも佐助が少なくとも明治生まれでないことだけは言いきれそうである。

池田蘭子氏に『女紋』執筆を勧めた足立巻一氏としては、この岡本説は納得しがたいものだったので、<sup>2)</sup>「考説 立川文庫」に、「岡本良一「猿飛佐助考」は、…猿飛佐助の名が真田大助…由利鎌之助ともに出ていることを報告した。しかし、これには具体的な人物像はまだあらわれてはいないし、この資料は吟味を要すると思う。いまのところ、猿飛佐助が具体的に描かれた確実な資料は、明治四二年に中川玉成堂から出版された玉田玉秀齋講演、山田酔神速記『真田幸村漫遊記』である」と書かれている。

歴史家が近世の成立であることは間違いないという史料、しかも全く別の直接的な関係の認められない二つの史料に、その名前を見出せるのであるから、猿飛佐助の名が江戸に由来することについては間然

する所が無い。また、岡本氏は後輩から氏が第四高等学校理科から京都大学の国史科へ進んだ理由を訊ねられて、「立川文庫の読みすぎかなあ」と笑って答えたという<sup>3)</sup>。立川文庫に郷愁を覚えることはあっても、眨めようなどというつもりは毛頭なかったろう。そのことは「猿飛佐助考」中の足立氏が引かなかった部分に、

猿飛佐助は徳川中期以後に、はじめは微々たる忍びの者として生まれ、徐々に忍術名人として肉づけされて行ったものに違いない。しかし、それがいわゆるスーパーマンになり、民衆の人気者になるにはやはり立川文庫を待たねばならなかった。

とわざわざ書き記してあることから明らかである。岡本氏の猿飛佐助の成長についての見通しを、私が読んだ江戸の小説によっても少し肉付けしてみようと思う。

猿飛佐助は江戸時代の実録の中で生まれた。先に岡本氏の文中にあった「真田三代実記」も実録の一つである。実録は近世の小説の一ジャンルで、江戸時代に実際に起こった事件を小説化したものである。

実在した人物が実名で登場し、徳川幕府からは出版することを禁じられていたため、手書きの写本で流通した作品群である。因みに、徳川家に関わるものは写本であっても許されなかった。ただ、それはあくまで建前であって、実際には実録は大量に書き写されて出回っていた。現存するものも多く、古書肆のカatalogでしばしば目にするものである。

忍びの者は、実録『難波戦記』から登場している。『難波戦記』は寛文年間(一六六一―七三)までには成立しており、大坂の陣に取材した実録の中では早い出来のもので、しかも広く流布して後続作に大きな影響を与えた作である。『難波戦記』後の実録でも、忍びは家康の動向を報告したり、幸村の命で茶臼山の陣中に放火したりしている。名前がつけられたこともある。そして、天明初年(一年〓一七八

一)までには作られていた『厭蝕太平楽記』に幸村の家来として登場するのが、猿飛佐助の初見である。『厭蝕太平楽記』は諸本が大量に存在する著名な実録の一つで、徹底して大坂最前であるところが最大の特徴である。冬の陣は勿論夏の陣でも大坂方は関東に連戦連勝、しかしながら、獅子身中の虫である淀殿や大野修理治長父子のために遂に大坂城を焼き、秀頼と軍師真田幸村以下は薩摩に下るという内容である。岡本氏が紹介された古地図も標題からすると、あるいは『厭蝕太平楽記』を参考にして作成されたものではなかったか。大阪城天守閣特別展「真田幸村と大坂の陣」(二〇〇六年一月一日―一月二二日)に、この古地図は出品され、その時刊行された図録によって、猿飛佐助とその隣には村川兵助の名を確認することができた。村川兵助は『厭蝕太平楽記』の増補作『本朝盛衰記』の中で猿飛と共に活躍する忍者である(後出)。地図の製作者が参照したのは、『本朝盛衰記』の方であったかもしれない。実録においては書名が同じであって内容が異なる作も、逆に書名が異なるのに内容は全く同じ物も、頻繁に見られるのである。

さて改めて、『厭蝕太平楽記』で猿飛佐助の名前が出るのは物語のごく初めの方である。関が原の合戦後、真田昌幸と幸村及び幸村の子大助達は紀州九度山に蟄居しており、植田城には家康の使者が送られる。城に残ってこの使者と応対した真田の郎党こそ、猿飛佐助と根井浅右衛門であった。二人は真田(父子)に深い所存があつて残して置いた者たちで、植田城の引き渡しを済むと諸国を廻って情勢を伺った。これ以降、二人の名は『厭蝕太平楽記』に見えない。その代わりと言おうか、猿飛佐助の弟分として「立川文庫」等で活躍する霧隠も『厭蝕太平楽記』には登場する。才藏という名前はまだないが、「猿飛」同様に「霧隠」もたまたま古い本にも同じ名字の者がいた、ということはずあり得ない。霧隠の名も江戸から続いてきたと断じてよ

い。標題は「江戸の猿飛佐助」としたが、霧隠の活躍も本稿では猿飛と併せて見てゆくこととする。大坂城に入った軍師真田幸村のもとへ、先年九度村で一命を助けた、徳川方の大名浅野家に仕える忍び霧隠がやつてくる。霧隠は幸村への恩返しのためとて、小幡景憲（おぼたかげのり）『厭蝕太平楽記』では全く触れられないが、江戸時代の代表的な軍学である甲州流軍学の祖）が徳川の廻し者であると明かし、小幡に誘われて関東に寝返った者達の名を記した帳面―七百人余もいたらしい―等を幸村に差し出す。霧隠が登場するのも、この一度きりである。

『厭蝕太平楽記』での猿飛や霧隠の活躍は、それぞれ一度ずつしか登場しないことが示すように、それほど目覚ましいものではない。登場回数を飛躍的に増やすのは『本朝盛衰記』である。『本朝盛衰記』は『厭蝕太平楽記』をすつかり吸収した上で大増補した作で、文政年間（一八一八―三〇）には成立していたようである。幸村が漫遊するくだりもあり、全五編中第五編（附録とするものもある）では、薩摩に下った幸村が薩摩勢を率いて琉球に出兵する。『本朝盛衰記』から猿飛と霧隠が登場する場面を抜き出してみる。

『厭蝕太平楽記』で唯一度猿飛佐助の登場する場面はそのまま『本朝盛衰記』に引き継がれ、その後には次の一文が挿入される。「此兩人の郎等（猿飛佐助と根井浅右衛門）間諜の妙術を得たる曲者とぞ知られける」。実は『厭蝕太平楽記』では、彼らは忍びとは紹介されていなかった。諸国を巡って情勢を伺うという役目から、『本朝盛衰記』の作者が彼らは忍びだったと補足したのである。『本朝盛衰記』の猿飛と根井は幸村の郎党であると明記され、諸国を廻った後、九度山で幸村に仕えている。兄信幸が幸村を徳川方に招くのをあきらめて帰った後、佐助と根井浅右衛門（原文には割注で「きりがくれの浅右衛門が事也」とある）は関東諸方に間者を入れ、地理やその人間が勇敢か臆病かということまで幸村に報告させる。ただの忍びではなく忍び

の頭領であつたらしい。根井即ち霧隠としたのは新しいが、『厭蝕太平楽記』で大坂城入りした幸村の許へ浅野の忍び霧隠が恩返しにやつてくる一条は、そっくり残っている。浅右衛門が真田の家来であるのに対し、今度の霧隠が浅野の家来である以上、二人は別人でなければならず、霧隠が二人いたことになっている。

幸村の後から大坂に入城しようとする真田大助を、浅野の家来達が討ち取ろうと待ち構えていた。浅野家に間者として入っていた猿飛佐助が、すぐにこのことを大助に告げる。それによって大助は伏兵を用いて浅野勢を撃破することができた。夏の陣では、家康が僅かの近習を連れて亀井村にやつてくるのを、佐助が幸村に報告する。佐助、この時は家康の陣にもぐり込んでいたらしい。幸村は佐助の一報により、すぐさま伏兵を向かわせた。

五月二日、家康がおびき出されて平野へ着陣したものの、またもや道明寺へ帰ってしまったことを、家康の陣中であつた「忍びの頭」霧隠浅右衛門が幸村に知らせる。幸村の命で霧隠は再び敵陣に紛れ込み、「戦わずに道明寺へ退いたのは家康が病気であるか、関東へ帰陣する前触れだろう」と風説を流す。この風説で怖気づいた東軍が退却するところを、真田方が追い討ちする。この後のくだりの原文を引用する（読者の読み易さを考慮して、濁点・句読点・鈎括弧を加え平仮名に漢字を宛てる等、相当に手を入れた）。忍びの者がその能力を発揮して、大いに家康（原文では「君」）を苦しめている。

しかる所に真田が忍び頭霧隠浅右衛門・篠原平馬・沼田一平・遠山与三次・土穴栄蔵の五人、かねて幸村が下知を受けし事ゆへ、大軍の中を四方八方を尋ね廻るに、はたして馬の左右を守護して東を指して落ち延びける。「扱こそこやつ、ござんなれ」と五人姿を現はし、懐中せし放当玉を打ちかけしかば、左右を守護せし近士十三人喉輪を打ち貫かれて微塵と成て失せにける。大久

保・安藤・成瀬等是を見て、「扱こそ敵より忍びの者、それ老人も余すな、打ち取れ」と激しく下知を伝へければ、旗本屈竟の輩四五百人、「畏まる」と右の五人をばらばらと取り巻きたり。五人が出で立ち一様にして黒皮威しの鎧と同じ毛の兜を着し、いづれも手に三間柄の皆朱の鎧を引提て、「信州上田の城主にて真田左衛門幸村なり」と五人名乗りて(原文割注「いづれも名代也」、十重二十重に取り巻きし関東勢を五人五所に分かれて、突ては落とし切ては落とし、猛虎の勢を出して力戦す。関東方大軍といえども初めの手並みに懲りては、今又五人共に真田と名乗るに肝を冷やし、逃げんとする者のみ也、さらに戦はんと思ふ者なく、これゆへ討たる、者数知れず。かの朝日に霜の消ゆるがごとく、これゆへに成て乱れけり。此時、君は近士四五百人、斗り守護していよ／＼東を指して逃げ給ふ。五人は散／＼に敵を八方へ崩し、跡を慕ふて来るに、大久保声を励まし、「汚なき味方の者共かな、鉄砲づくめに討ち取れ」と言ひ捨て、君の乗り給ひし馬を引き立て／＼落ち忍びけり。彦左衛門声を懸けし事ゆへ、旗本の鉄砲組五百余人引き返して追ひ掛け、五人をまん中に取り込み雨より繁く打ちければ、五人の忍士も岩木にあらざれば鉄砲の囲みを出る事あたはずして、直に忍術を以て忽ち姿を隠しければ……

ここに猿飛佐助の名前がないことは甚だ残念であるが、それはともあれ、最後の所で五人が忍術で姿を消していることにも注目したい。『伽羅先代萩』の仁木弾正のように鼠に姿を変えることもしておらず、「立川文庫」の猿飛佐助さながらである。江戸の忍びもここまで腕を上げていた。

その後も『本朝盛衰記』では、猿飛佐助が家康と秀忠の陣が道明寺で合流しようとしていることを幸村に報じ、幸村は穴山小助以下七人の影武者を秀忠勢に向かわせる。五月五日のことであった。七日、薩

摩行きの支度も整った後、佐助と村川兵助は幸村から鉄砲十挺を預けられて船場で伏兵となるよう命じられ、二百騎を卒して勇戦する。ここの二人は忍術を用いていない。村川兵助はこれ以前に忍びとして登場し、伏兵を率いて戦い、この後切腹して果てることまで記されている。『本朝盛衰記』が増補した大勢の内の一人だが、中々の活躍ぶりで印象に残る人物である。

五編では一度話が前に遡る。上田籠城の際に「忍びの名人」猿飛佐助は五十人の手下と共に夜討ちの手柄を立てる。関が原合戦の後、真田昌幸に命じられた佐助と根井(霧隠とは記されない)浅右衛門は諸国を巡った末に薩摩にわたり、佐助は昌幸が創作した薩摩の国人に琉球攻めを唆す詩を流行らせる。この計略はまんまと成功した。五篇には浅野の家来の霧隠が再び登場する。二篇に出てきたときには『厭蝕太平楽記』同様「霧隠」とのみ記されていたが、ここでは霧隠武太夫とある。浅野に命じられて幸村の隠れ家を探していた霧隠武太夫は、山中で迷う内たまたま見つけることができたものの、真田大助に捕らえられてしまう。真田の家来は首を刎ねるよう進言したが、幸村はこれを退けて帰してやる。一命を助けられた霧隠は恩を感じ、浅野家に戻って「幸村は見つけられなかった」と言上した。『厭蝕太平楽記』で「恩返し」とだけあったのを、具体的に霧隠がどのような恩を受けたのか新たなエピソードを創って説明している。実録は先行作を増補する際に、こういう手法をよく用いるのである。

『厭蝕太平楽記』と『本朝盛衰記』における猿飛・霧隠の活躍は大よそ以上である。原文引用箇所のような働きはむしろ例外的で、忍びの者の仕事は、情報の収集・報告それにその操作が主たるものであったと言つてよい。二作の主役は真田幸村であり、猿飛・霧隠の立場は個性的な端役、というあたりであろう。

『厭蝕太平楽記』は眼で読まれただけでなく、講釈(講談)の種

として耳からも享受された。二代目旭堂南陵の大正時代の講談速記『難波戦記』は現在も上方講談『難波戦記』の種本として使われているのだが、読み比べてみると明らかに『厭蝕太平楽記』にその多くを拠っている。当然猿飛・霧隠も登場する。第五五席、幸村の九度山の閑居に忍び込んだ浅野の忍び山本九兵衛は、幸村に命を救われた後に家来と成り、幸村の命で霧隠才助と改名する。第八六席冬の陣で家康・秀忠が大坂に到着する前に藤堂が真田の出丸を夜討ちすることを、霧隠才助は幸村に報告している。その後で南陵はこう解説を加えている。「総じて忍術と云ふものは斯う云ふ所へ使ふ為めに陣中で抱へたものである、油断なく井伊の陣中へは猿飛佐助、藤堂の陣中へは霧隠才助の二人を幸村忍ばせてある。だから敵陣の様子は城内にあつて手に取る如くに幸村に判つてゐる」。第一一五席でも、霧隠は陣廻りしている家康が替え玉であることを幸村に注進する。二代目南陵のこの速記は立川文庫より後れるが、同じく大坂の講談師で多くの速記本を残した神田伯龍の『難波戦記』『難波戦記 冬合戦』『難波戦記 夏合戦』（博多成象堂）は明治三二―三三年（一八九九―一九〇〇）の発行で、立川文庫よりかなり以前のものであるが、やはり『厭蝕太平楽記』に拠るところが多い。『冬合戦』『夏合戦』には霧隠才蔵の名前を見出すことが出来る。『冬の陣』第一回で、徳川の廻し者小幡の動向を幸村に告げ、その召し捕りに一役買うあたり、『厭蝕太平楽記』の脚色である。その後も「忍術に妙を得た」霧隠は敵陣に潜入して情報を入手する。夏の陣では徳川に内通して千姫を奪おうとした青木民部を殺し、千姫を背負つて秀忠に近付いて斬り付けたものの、本多出雲守に打ち殺されてしまう。これは最後に出雲守に殺されることを除いて、『厭蝕太平楽記』における及川八内という武士の働きを、ほぼ霧隠に置き換えたものである。それにしても、「最う一ツ腕が立つて居ない所へ刃物が鈍かつたと見え」て出雲守に打ち殺された霧隠を、大坂方

の豪傑の一人と称するのは憚られる。冬の陣には猿飛佐助は姿を見せなかったが、同じく伯龍の『難波戦記後日談真田大助』（博多成象堂 明治三四年）には登場する。この講談は前年発行の『難波戦記後日談』（博多成象堂 明治三三年）と併せて一続きの話である。秀頼・幸村らが薩摩に落ちた後、豊臣家再興を願つて秀忠から秀頼に大坂城と拾万石の墨付をもらうために、真田大助・荒川熊蔵達が東下りをし、幕府や諸藩の妨害を突破して墨付を得、さらに朝廷の綸旨をも頂戴して薩摩に帰国するというもの。結局豊臣家は再興されないわけであるから、大助達の行為は無駄であつて話全てが水増しと言つてよい。江戸の実録にこのような話は見出せていない。恐らく明治の講談師の創作であろう。主役は大助で重要な脇役は荒川熊蔵であるが、京都が舞台となつたぐらゐりで猿飛佐助が登場する。「先年討死を遂げました霧隠の才蔵にも勝る忍術家」と称され、狸が化けた町娘に己は狂犬に姿を変えて飛びついて正体を暴いて見せたりする。江戸の実録から離れると、立川文庫に近づくようである。

東京の講談師が口演した『難波戦記』も見ておこう。『真田幸村伝』（明治三〇年）には「伊賀流の忍術忍びの名誉」申酉八郎と霧影才造が登場する。申酉は何とも奇妙な名字で猿飛をことさら変えたものと思われる。霧影才造も同様に霧隠才蔵をもじつたものだろう。二人の名前は全一四席の中で併せて十回ほど語られる。幸村の大坂入城に際して、霧影才造が幸村の具足櫃を持つて先に隠れていたこと、申酉八郎が真田屋敷を襲つた寄せ手を地雷火で焼き討ちしたことなどはめざましい働きと言えようが、敵の動静を注進するという江戸の実録以来の任務が、やはり彼らの主たる働きである。

猿飛・霧隠は江戸時代に生まれ、そのまま近代を迎えた。しかし、一編の中での役割はそれほど大きなものではなかった。それが、立川文庫第四〇編『真田三勇士忍術名人猿飛佐助』になると、主役に抜擢

されている。信州鳥居峠の佐助は戸沢白雲齋から忍術を習った後も山の大猿と友達で、その大猿を眼力で睨み落とした幸村に敬慕の心を抱いて家来と成る。―異人から兵法を学ぶことはあっても、江戸の実録に猿と友達といった変わった人物設定はまずない―幸村に仕えた佐助は、他の小姓達が佐助一人が幸村に気に入られていることを妬み、布団蒸しにしようとしていることを知り、夜目が利くので三好清海入道を身代わりにして翌朝何食わぬ顔で出仕する。佐助はこの後も姿を消す特技を使って、しばしば敵をからかう。―主筋とは全く関係のない悪戯が描写されるのも、実録では稀なことと言ってよい―佐助は幸村に命じられて隣国の平賀源心入道の城に単身姿を消して乗り込み、匿われていた真田家の奸臣を源心入道に殺させた後に姿を顕し、怒って真田家に攻めかかった入道まで討ち取ってしまう。―真田が平賀を滅ぼした手柄は佐助が一人占めしている。実録の忍びが、一城の主を一人で討ち取るような目覚ましい手柄を挙げたことはなかった―長い長い『難波戦記』の中では端役に過ぎなかった猿飛・霧隠を主役に据えたのは、立川文庫であり二代目玉田玉秀齋及び山田酔神(阿鉄)であった可能性は大である。もともと、それを可能性で終わらせないためには、明治期の講談速記本を大量に読みこなす力業を必要とする。<sup>5)</sup>

注

(1) 『岡本良一史論集上巻 秀吉と大坂城』所収「『猿飛佐助』考」に拠る。清文堂 一九九〇

(2) 『立川文庫の英雄たち』所収。中公文庫 一九八七

(3) 注1「あとかぎ」渡辺武氏

(4) 立川文庫第四〇編『真田三勇士忍術名人猿飛佐助』(大正三年一九一四『名著復刻 日本児童文学館』ほるぶ出版 一九七二に拠る)では、佐助と由利

鎌之助と霧隠才蔵がこの順番の義兄弟と成る。

作家玉川一郎氏に池田蘭子氏が語った立川文庫創作秘話の一節にも、「…猿飛佐助も霧隠才蔵もみいんな、うちの創作した人物ですもん。」とあった。(『大正・本郷の子』青蛙房 一九七七)

(5) 『神戸新聞』連載。大正六年(一九一七)一月から一八年八月まで全二四〇席。旭堂南海師から神戸市立図書館蔵の同紙マイクロフィルムの紙焼きをコピーしていただいた。欠号が全部で八枚ある。

(6) 所見本は明治四五年(一九一二)発行。二〇〇四年姫路文学館発行の『大正の文庫王 立川熊次郎と「立川文庫」』二〇頁に旭堂小南陵(当時)師蔵本の口絵が載っており、そのキャプションに「『難波戦記後日談 真田大助』(明治三四年二月)」とあることに拠る。

(7) 所見は明治三六年刊の第四版。『真田幸村伝』の演者は、表紙及び内題には宝井琴凌とあり、奥付には神田伯山事玉川金次郎(二代伯山で初代松鯉となつた)とある。どちらが正しいのか(あるいはさらに別の講談師か)わからない。いずれにしても東京の講談師であり、発行者も浅草区馬道町一丁目一四番地 中村惣次郎である。

(8) 四代目旭堂南陵師の『続・明治期大阪の演芸速記本基礎研究』(たる書房 二〇〇〇)第一章第六節漫遊記物の中で、講談速記本における猿飛佐助の初出は明治三五年岡本偉業館発行、西尾魯山講演の『真田昌幸』、との指摘がある。この速記本は筆者未読であり、立川文庫との比較には及んでいない。

付記 旭堂南海師からは注5の『神戸新聞』以外にも、御架蔵の『難波戦記後日談』『難波戦記後日談真田大助』『真田幸村伝』を借覧させていた。深く感謝する。